チベット語訳『妙法蓮華註』「薬草喩品」和訳

望　月　海　慧

1　はじめに

本稿は、身延山大学東洋文化研究所の法華経研究班による研究成果の一部であり、先行する「チベット語訳『妙法蓮華註』和訳」に続くものである。今回は、第５章の「薬草喩品」の和訳を提示する[1)]。既出の和訳を提示すると次の通りである。

①「チベット語訳『妙法蓮華註』の序文の構成について」『身延山大学仏教学部紀要』13, 2013, pp. 1-22. ②「チベット語訳『妙法蓮華註』「授記品」和訳」『身延山大学仏教学部紀要』15, 2014, pp. 1-18. ③「チベット語訳『妙法蓮華註』「化城喩品」和訳」『身延論叢』20, 2015, pp. 1-54. ④「チベット語訳『妙法蓮華註』「五百弟子受記品」和訳」『身延論叢』19, 2014, pp. 35-58. ⑤「チベット語訳『妙法蓮華註』「授学無学人記品」和訳」『日蓮教学教団史の諸問題』山喜房佛書林 , 2014, pp. 41-51. ⑥「チベット語訳『妙法蓮華註』「法師品」和訳」『法華文化研究』39, 2013, pp. 1-15. ⑦「チベット語訳『妙法蓮華註』「見宝塔品」和訳」『日蓮仏教研究』6, 2014, pp. 7-22.

2　『妙法蓮華註』「薬草喩品」の構成

和訳を提示する前に、本章の全体の構成を提示しておく。

［１］知らせるべきこと　　［２］円満なる言葉
［３］法の解説の利益　　［４］説法の次第
［５］一切種智の顕示　　［６］譬喩の分類

［７］四種の譬喩　［８］結果が熟する譬喩
［９］結果の成立　［10］一味が種々を潤すこと
［11］譬喩と適合　［12］功徳の特徴により導く
［13］意味により導く　［14］知見により導く
［15］根に応じて説くこと　［16］結果が異なること
［17］一味の説明　［18］衆生の行を知ること
［19］如来の知と衆生の知　［20］迦葉の知
［21］偈の導入　［22］説法は突然ではないこと
［23］疑惑の生起　［24］能力に応じた説法
［25］衆生の根の成熟　［26］雨が等しく降ること
［27］潤されるもの　［28］潤す意味
［29］譬喩と意味の結合　［30］結果を潤すこと
［31］衆会を集めること　［32］利益
［33］大乗の原因　［34］平等であること
［35］利益をなすこと　［36］善悪の無差別の説法
［37］聞による楽の獲得　［38］種姓がない譬喩
［39］薬草の譬喩　［40］結果の獲得
［41］結果の成熟　［42］天人への利益
［43］大小の乗の次第　［44］まとめ

本章も、その他の章と同じように章のタイトルの解説から始まるが、漢文は「来意」「釈名」「解妨」からなるのに対して、チベット語訳は「何故に（ciʼi phyir）名付けたのか」「何から（ci las）名付けたのか」の２項目である。助詞が異なっているだけだが、示す意味はほぼ同じものである。漢文の「来意」は後者の方が近いが、実際の内容は、後者では名称の説明をしているので「釈名」が相当する。また、「解妨」に相応する箇所はチベット語訳はなされていない。

また、『法華経』の本章の前半の偈については、鳩摩羅什訳は54偈半であ

るのに対して、サンスクリットとチベット語訳は44偈である。そのために、チベット語訳では『法華経』の偈文の対応箇所の特定が困難になっており、解説文での偈の分類に対する翻訳もなされない。さらに、鳩摩羅什訳では、この前半の偈で本章を終えているために、同訳に依拠した『妙法蓮華経玄賛』では経典の後半部分に対する注釈は行われていない。『法華経』のチベット語訳の文章はまだ続いているのだが、同論の漢文からのチベット語訳である本論もそこで終わっている。

3　チベット語訳テキストの和訳

これ以後は「薬草喩品」であり、それにも、何故に名付けたのかと、何から名付けたのかの二種がある。上に鈍根のために譬喩と意味を合わせて説くことで聖シャーリプトラなどが法を考察し、授記しており、また、ここで中根のために譬喩により法を説き、授記することが望まれるので、この譬喩を説いてから解説しており、注釈にも、この章は大乗において我慢に執着するものを導くために、「一乗とは別に二[乗]と三[乗]は存在しない」と説かれているからである。最初に、[前章で] 家の言葉の譬喩により下品の衆生を方便により導いて、天と人の楽を設定し、「信解品」を説いた中で、二種の乗を如来の乗と同じと考え、大乗を成就しようとしない者に大乗を成就させ、この章の中から大乗は一向に我慢があるが、三乗を捨てることによりそれぞれにある心の我慢を制圧するために一乗が説かれるからであり、一雨が降る潤いにより草木が異なって生じるように、如来の一音により善根がそれぞれに熟するように。『聖大槃涅槃経』にも、「如来が法を説く際に、一乗を一道により説く」と出ており、一度の説示からそれぞれの根を区別して説かれている。[2)]「方便品」に、智と門を説いたどちらも甚深なる一乗と合わせられる。四諦をさまざまな能力の者がそれぞれ理解する如くである。[3)]

名称は、薬草が病気を治すように、無上のこの聖なる薬によってもすべての煩悩の病を治すので、聖教と教義と行と結果が「聖なる薬」と言われる。薬が大小の病にそれぞれ有益なように、無上のこの乗も３種の乗を１つに熟するから。[4)]

［１］経に、「それから世尊は長老」と言うものから「それらの辺際は容易に理解できない」と言うまでには、[5)]この章で最初に賞讃と、カーシャパが知らせるべきものと、意味のまとめで、授記について［説かれ］、これは最初である。如来の功徳は述べ難いので「無辺である」とまとめられる。[6)]

［２］経に、「カーシャパよ、如来は」と言うものから「それらはそのようになる」と言うまでには、[7)]如来が世間に生じ、多くの有情に利益をなし、法の意味の考察は異なり、自分自身で理解し難いことを示しており、これは最初で、如来の円満なお言葉は偽りがないことが説かれている。[8)]

［３］経に「カーシャパよ、如来は一切法を理解している」と言うものから「そのようにしている」と言うまでは、[9)]法の解説による利益で、如来は大悲と善巧方便をもっているので、特徴を離れた法を示すことで有情を成熟させており、聖教が論理をともなう論理の典籍を成立させていることで、結果を獲得させることが知恵により設定されている。[10)]

［４］経に、「一切法の意味の次第について」と言うものから「聖者の最高を得て」と言うまでには、[11)]法を示す次第が３つに異なるので、衆生が有と無の二見を越えないことと、真実の意味の辺と、衆生の心の行が異なることにより起こされており、経にも「有と無の方向に入り、信解と三性により真実の辺に入る」と出ており、一切の行と同じものに入ることを知っているので知に障碍がないので、衆生の心の次第のままに法を示している。[12)]

［５］経に、「カーシャパよ、如来・阿羅漢である正等覚」と言うものから「知恵に明らかに入れる」と言うまでには、[13)]衆生の真如を真実のままに自分で知らないので、如来は疑いのない辺を知り、衆生の根の次第を知っ

ているので、衆生に対して如来の知恵が説かれ、説かれなければ、自と他の特徴を知らないからである。また法師は、前後の特徴を説くことに長けているので説者であり、また善巧方便の知恵によりそれぞれの特徴を示している。それにも４種あり、菩提と涅槃の特徴を区別して善巧方便の知により衆生の行の区別を知ることと、真如の特徴を衆生に示すことを知ることと、菩提の知恵と結果を衆生に理解させることに障碍なく入ることと、自分自身がその先行したものに似た行に入っていることで他者もその知恵に入れることである。また、その区別に４種あり、諸法の諦そのものを極めることと、有と無を知ることと、知恵が生じることに心が歓喜することと、未了義と了義を説くことを知ることである。また善巧方便の知恵に関して、諦そのものが世俗を離れている際に、言葉で述べ、説くことが善巧方便の知である。「知恵による」とは、依所の意味で、仏の知恵が見る場所が、真実の辺である。また、聖教は論理に努めることで、論理は行と同じで、行は結果と結合して、「仏地」と言われる。「如来が見て」とは、有と無の諸法を見られて、諸法は遍計と依他起と円成実の三性である。衆生の意楽を知ることは、衆生らの行とそのさらなる信解と入を障碍なく知ることである。諸法の特徴を真実のままに見られ、衆生にもそのように示している。それと同じことを示したものが疑いのない知恵で、それと同じ得により衆生たちに１つの法を示すことで、異なる根の５種の乗になったものは１つで、２と３としては存在しない[14)]。

［６］経に、「カーシャパよ、このように、例えば」と言うものから「そのように生じる」と言うまでには[15)]、それらの譬喩も２種に分けられ、まとめた譬喩と、それぞれの譬喩とである。これは最初で、「山と地」と言う地上にあるものは起こされたものである。「三千の大千」とは、生じた大地である。それらの木と樹液も、世間と出世間の善法の種子の譬喩で、「薬草と森」とは五乗の種子がそれぞれ異なるものになった譬喩である[16)]。

［7］経に、「豊富な水を含んだ雲が沸き上がり」と言うものから「大千の世間界」と言うまでには[17]、それらの譬喩を４つに区別し、法王が世間に生まれた譬喩と、説いたものにより場所を潤す譬喩と、異なる結果を熟する譬喩と、そのように潤すことを考えない譬喩との４つである。「雲が広大に起き」とは最初の譬喩と合わされる。その次のものは、第２のものと合わされ、変化身により多くの利益の意味を満たして覆うことが、雲の意味である。その雲も、10功徳をともなうことを偈の中で示している。１つの変化身により一切の世間界を願い、遍満して現れるので「覆う」と言う意味である[18]。「一時に雨を等しく降らせる[19]」と言うことで、「結果が異熟する」と言う意味と、一音による説法の意味である[20]。

［8］経に、「この草と樹木」と言うものから「広がり、広大になる」と言うまでには[21]、結果が異熟する譬喩で、そこでものを潤して熟することと、付随的に熟することである。そこで、この種姓に３種あるので、乗も３種になっており、それについても、経に、「例えば、病人に３種あり、１つは、良医に会っても、会わなくても、確実に治るもので、１人の病人は、医者に治療されれば治り、治療されなければ治らないもので、１人は医者が治療しても治らないものである」［と説かれており］、大小の結果の次第もそのように合わされる。大中小の木を説いたのも、聖教と、教義と、行と、結果の譬喩で、結果が順序通りに合わされる[22]。一味の雨により小さいものが潤されることは、不退転地にとどまる者たちである。大きなものを潤すことは２種で、第７地以前の小を潤すことと、第８地以後の大を潤すことである。それも、初地以後は、１つに有漏の成就である。第７地以前は、２つの無漏の成就である。第８地以後は１つに無漏の成就である。また、初地以前は小を潤し、初地以後は不退転地で、大を潤す[23]。

［9］経に、「そのように花と」と言うものから「名称を得る」と言うまでには[24]、聖教と結果がそれぞれ説かれ、「１つの説法から異なる結果を成立

させる」という意味である。一雨が潤してから花と実がそれぞれ生じるように、最初の聞と思の慧は、花のように見える。成就すれば結果を得るこの譬喩は実の譬喩である。「一味の水により」とは、「一音により」と言う意味である。増上戒と慧と定も、それぞれの根から大小の乗によりそれぞれを見ることも、それと同じである。[25)]

［10］経に、「一地にある多くの薬草と」と言うものから「潤すように」と言うまでには、[26)]それぞれからそのようになされることを考えない譬喩で、三乗の種姓も真実の１つの教義に依ることで、一地にあることと同じで、１人の如来が説いたものから理解することが雨の一味により潤される如くで、結果がそれぞれ熟することと、樹木が種々になることも思わず、知らないことである。[27)]

［11］経に、「カーシャパよ、如来は」と言うものから「一音により一切の世間界を覆う」と言うまでには、[28)]そのように譬喩を意味と合わせており、経に出ているように理解しなさい。[29)]

［12］経に、「カーシャパよ、如来は」と言うものから「正等覚」と言うまでには、[30)]結果の潤すことが異ならない譬喩で、先に意味が説かれ、後に異なる譬喩と合わせられる。最初も、如来自身から導かれ、意味は３種である。功徳の特徴から導かれるものと、意味をなしてから導かれるものと、知見から導かれるものとで、これは最初である。[31)]

［13］経に、「越えていないものを越えさせる」と言うものから「涅槃させる」と言うまでには、[32)]意味をなしてから導くことで、４つの誓願を完成させることである。苦から解放させることと、罪過である不善業から解放させることと、楽を得ていないものを楽に入れることと、涅槃を得ていないものに獲得させることで、苦を知り、集を捨て、道を修習して、滅を明らかにすることで、次第の如くである。[33)]

［14］経に、「私は現在のこの世間と」と言うものから「道の修習を知る」

と言うまでには[34]、一切を知り、一切を見ることを示しており、それも三明と二智と法智との３つを示している。三明は、三時の明である。二智は、勝義の知恵と世俗の知恵である。対象を明らかに知ることは、行の明らかな断で、結果を明らかに知ることである。智とは、正しいものと正しくないものを知ることで、断とは、善と不善の断で、知ることは、修習と成就を知ることである。また３種の乗が、順序通りに合わされる[35]。

［15］経に、「そのように、カーシャパよ、多くの有情」と言うものから「力のままに入る」と言うまでには[36]、「根と」とは、鋭根のために大乗が説かれ、鈍根には二乗が説かれ、鋭根のために大の薬草が説かれ、鈍根には小の薬草が説かれ、精進をもつ者に成就の行が説かれ、怠惰な者には仏の随念が説かれている[37]。「衆生がこの時に楽を成立し、徐々に一切智の法に力と威力のままに入る[38]」と言うことは、衆生が法を聞いただけで楽を得ることで、それも世間の楽と、出世間の楽である。世間の楽は、この時に快い行をともない、善行を成就させることで楽の結果を得ることである。出世間の楽は、障碍を浄化することで法性に入ることで、菩薩道である。それも、さらなる信解により起こされた道と確定した道で、二種の障碍を捨てることで、次第のままに入っている[39]。

［16］経に、「そのように、カーシャパよ、例えば」と言うものから「自分で自分の種姓と量に生まれる」と言うまでには[40]、譬喩と意味が合わせられ、結果は異なるものになる[41]。

［17］経に、「カーシャパよ、如来は」と言うものから「自分で自分を知ることも、理解することも、考察することもない」と言うまでには[42]、後の譬喩と意味が合わせられ、「一味」とは、特徴がないものとして一味で、無相の味と、無漏の味と、解脱の味が１つである。そのように一味によりそれぞれに熟し、木と実がそれぞれ潤すことも、自分でそれぞれから思うことがないことである[43]。

［18］経に、「それは何故か、と言うのならば、カーシャパよ」と言うものから「ありのままに見られた」と言うまでには[44]、それにも衆生の行を総じて知ることと、それぞれを知ることと、その２つを知ることをまとめている。衆生がそれらをどのように知るのかは、有為や無為の在り方や、行や心の門からありのままに知ることである[45]。「何を思い[46]」とは、それぞれを知ることが説かれており、智慧の３種の門から自性を知ることと、行と自体を知ることと、何れかの行により何れかの結果を得ることと、何れかの聖教で何れかの結果が成就することで、その四法の次第は、「世尊はご存知である」と言われる。直接知覚で見ることと、如実に見ることがそれらの知をまとめており、衆生の基体と、心の行の特徴と、自体と、自性をすべて見られるので、見られている[47]。

［19］経に、「それぞれにとどまるそれらの衆生」と言うものから「すべてを知る知恵は突然に説かれない」と言うまでには[48]、如来の知と、衆生の知とのその２つの知恵をまとめた殊勝が説かれており、如来の知恵は甚深で、衆生の知恵は小さくなっているので、如来の説いた甚深なものの場所ではないと説かれている[49]。

［20］経に、「カーシャパよ、如来は柔軟な言葉で解説し」と言うものから「柔軟な言葉は知り難い」と言うまでには[50]、偉大なカーシャパはこの甚深なるものを知るが、他の者は知らないことで、特徴は後に説かれている[51]。

［21］経に、「それから世尊がその時」と言うものから「信仰を知ってから」と言うまでには[52]、これ以後の偈[53]により上の意味を繰り返して示しており、51偈により、上の意味を繰り返して後に１偈によりまとめた意味が説かれている。「法王」とは、法に精通していることで何れかの法を説くことに迷乱がないので、法王である。「生じるものを制圧する」とは、「三世間を制圧する」とか、四有と五有を制圧する」と言う意味である。また、この４偈に法身と報身と変化身が順序通りに衆生の利益をなすことと合わせ

られる。[54]

［22］経に、「知恵をもつ偉大な能力の者が説いた」と言うものから「有情たちに説かない」と言うまでには、[55]如来の説法は驚くべきことをなすことで、導かれることと了義が解説され、それぞれの根と合わせて、「最初の解説は突然に説かれない」と言う意味である。[56]

［23］経に、「その知恵は理解し難い」と言うものから「その如くなので、転生する」と言うまでには、[57]それぞれから疑惑と疑いが生じるので、「理解し難いと思われることを解説する」と言う意味である。[58]

［24］経に、「解説の言葉に似た対象と」と言うものから「見解を正しいものにする」と言うまでには、[59]「衆生が、如来の言葉と加持により説かれていないことを自分で知る知恵は生じないので、真実の意味を世尊が区別することで衆生の能力に応じて意味を理解し、明が生じる」という意味である。[60]

［25］経に、「カーシャパよ、例えば雲が」と言うものから「すべてに水も与える」と言うまでには、[61]如来が世間に生じ、法師も、例えば世間に生じて、雨を降らせる龍王が７日間雲を集めてから雨を降らすように、大悲の雲が十方のすべてに降らして、衆生の根が熟した時と合わせて法を説く。その雲も、稲光の行列をもつ雷鳴の音が太陽の光を妨げ、すべての輪を涼しくさせ、手が伸びて届くようになり、如来の光で十方を明らかにし、法の雷鳴を轟かすことで魔と邪見を怖がらせ、悲の雲により一切の方向を覆うことで有情を喜ばせ、誤った太陽が昇ることを制圧し、苦のすべての場所を離れて涅槃の場所を涼しくし、悲の集まりである身体と心に手が伸びて届くことだけを思うのである。[62]

［26］経に、「それが等しく降らしても」と言うものから「木になるいかなるものも」と言うまでには、[63]それぞれを熟し、功徳の雨を降らせ、それぞれの存在に生じ、生じたものに意味を成立させることで、「高低のない等

しい心ですべての意味をなす」と合わせられる。[64)]

［27］経に、「それと薬草が生えている場所からなのか」と言うものから「実と花もそのように開く」と言うまでには、[65)]潤されるものが説かれており、それも一般と特殊に分けられる。３種の乗がそれぞれの種姓に熟することは、木と枝と花の如くである。[66)]

［28］経に、「雲の雨により多くの薬草を」と言うものから「それは一味の雨を降らせる」と言うまでには、[67)]潤されるものに意味を成立させることで、それぞれに熟する譬喩である。[68)]

［29］経に、「そのように、カーシャパよ、仏はこの世間に」と言うものから「有情に真実の行を示す」と言うまでには、[69)]譬喩と意味を合わして、最初の２偈により結合が説かれ、他のものにより異なる結果が説かれ、これが最初である。[70)]

［30］経に、「そのように大仙は真実を述べた」と言うものから「私は望むものと涅槃を与える」と言うまでのこれにより、[71)]結果をそれぞれ潤したことが説かれており、これ以後は、特別に述べたものと、衆会を集めることと、利益をなして誠実に聞く者たちが利益を得ることと、それを聞いてから集まることで、これが最初である。種姓があるだけでは、正法により潤されていないので、身体は乾いている。[72)]

［31］経に、「天と人の集まりも私を聞きなさい。私を見るために近くに来なさい」と言うまでにより[73)]衆会を集めている。[74)]

［32］経に、「私は如来・世尊で、制圧されない」と言うものから「それは解脱と涅槃とである」と言うまでには、[75)]利益で、正法を説くことと、大乗の原因を説くことと、法を等しく説くことと、専ら利益のためと、善悪に分けることがないことで、これは最初である。[76)]

［33］経に、「菩提に入るために常にそれを」と言うものから「一音により常に法を解説する」と言うまでには、[77)]大乗の原因を示しており、２種の

未了義も大乗の意味で、一切の相を知る原因になっている。[78]

［34］経に、「それは平等の心により、平等でないものはない」と言うものから「１人の衆生のように他の有情に対する」と言うまでには、[79]これが平等であることを示している。我と我所を離れており、慈愛と憎悪を捨てており、遠近の心がなく、法を断つことがなく、妬みがないので、すべてに同じく法を示している。[80]

［35］経に、「他の行為をなさず、正しく法を解説する」と言うものから「雲が雨を明らかに降らせるように」と言うまでには、[81]専ら利益をなし、法を説くことで、「行く」とは涅槃である。「来る」とは明らかな菩提を示している。「入る」とは、法を解説し、利益をなすことである。「起きる」とは衆生の根を成熟させることで、大悲により決して衆生利益をなすことを厭うことがない。[82]

［36］経に、「聖者と下品の者を等しく理解する」と言うものから「すべての厭う心を捨ててから」と言うまでには、[83]善悪の区別なく法を説き、善根を見て、法を説くのである。[84]

［37］経に、「私は正しく法の雨を降らせる」と言うものから「多くの相の地にとどまるであろう」と言うまでには、[85]衆生たちに聞による楽の獲得を示しており、最初の９偈により譬喩と意味に合わされる。その次の４偈半により実と花の異なる原因の譬喩により結果と合わすことが説かれている。前に８偈により意味が説かれ、また半偈により譬喩が説かれ、最初の偈についても２つに分けられ、前の１偈によりまとめて導き、７偈によりそれぞれに区別して説かれており、これは最初である。「地にとどまるようになる」とは、大乗の十地と、種姓の地と、第八地と、如来の地までをそれぞれ区別して説かれている。[86]

［38］経に、「天と人の中から快いものと」と言うものから「それらは極微で、微細な薬草」と言うまでには、[87]考察すれば種姓がないことの譬喩で、

例えば極微の根を雨が潤す如くである。聖なる声聞は中程度の薬草の如くである。聖なる菩薩は、大きな薬草の如くである。[88)]

［39］経に、「それらは小さく、この世間に多くある」と言うものから「それは『薬草の最高』と言われている」と言うまでには、[89)] 薬草の譬喩が２種説かれており、「仏としてそれに似た行をもつ仏と確定する」と言う意味である。第７地以下の菩薩は「小さな薬草」と言われ、第８地以上は「大きな薬草」と言われ、「行を損なわない」と言う意味である。[90)]

［40］経に、「善逝の子の何れかで」と言うものから「そのように考えて譬喩を説いたことで」と言うまでには、[91)] 種姓をもつ地から大乗の結果の獲得と、涅槃までの大小の結果の獲得と、成就の譬喩が説かれている。[92)]

［41］経に、「如来の方便を知りなさい」と言うものから「十方を美しいままに」と言うまでには、[93)] 結果がそれぞれ熟し、得たものは特別なものになることと、譬喩を意味と合わせて、詳しく説いたものである。[94)]

［42］経に、「ここで常に世間を利益する法」と言うものから「満足させる」と言うまでには、[95)] 天と人に利益をなすことである。[96)]

［43］経に、「一切の世間を満足させてから」と言うものから「『大樹』とそれらは言われる」と言うまでには、[97)] 大小の結果から大小の乗の次第が説かれている。[98)]

［44］経に、「カーシャパよ、このような法を解説して」と言うものから「私の声聞はすべて仏になる」と言うまでには、[99)] 意味がまとめられ、[100)] 前に説いた意味を説き、後に了義を説いたものと、結果を得るための授記で、[101)]「聖なる声聞の行により仏になることを授記しても、成就を意図して授記したものである。菩薩の行を行じ、菩薩の行を損なっても、後に菩提に発心し、善根を損なわなければ、無上の結果を得る」と説かれている。[102)]

注

1）和訳箇所は、『丹珠爾（対勘本）：中華大藏經』第69巻，pp. 717-732に相応するが、批判的校訂版のテキストを身延山大学東洋文化研究所の『法華経研究叢書』の一書として出版する予定である。なお、〈付録〉「漢文テキスト「薬草喩品」の科文」は研究協力者金炳坤氏によるものである。

2）中村1972, pp. 712-713 に、「慈恩の三草二木説」として和訳がなされている。

3）781a4: 以三門分別一來意二釋名三解妨.

781a4-29: 來意有四　一者前爲上根初周法說鷲子法領佛法述成後方授記今第二周既爲中根喩說四人喩領今佛還爲以喩述成後方授記故此品來　二者**論說**對治七慢中第三有大乘人一向增上慢言無別聲聞辟支佛乘爲對治此故說兩喩前**譬喩品**爲對治凡夫求人天妙果次**信解品**爲治二乘有學執我乘與如來乘等不求佛乘今此品爲對治大乘人一向慢言無別二乘唯有一乘故**彼論**言第三人者令知種種乘異諸佛如來平等說法隨衆生善根種子而生牙故意顯一雨雖同三草二木生長各異佛敎雖同三乘二聖發脩亦別有爲機器各各別故亦有決定二乘者故由機性殊稟潤別故故**勝鬘云**攝受正法善男子堪荷四擔**涅槃亦言**我於一時說一乘一道乃至弟子不解我意說須陀洹等皆得佛道廣說如餘依人運載敎等名乘佛法雖同機脩有異故說此品　三者**方便品**初標智及門二皆甚深名爲一乘前**譬喩品說**乘有三體唯有一四人領解實一假三會智慧深今此會門門卽阿含敎同機異名會其門如說四諦三根俱聞依蘊處界緣起三性賴脩有異名曰三乘故知敎同而機異也故此品來.

チベット語訳は、「来意」の４種を理解しておらず、第４以下の翻訳を欠く。

781a29-b14: 四者十無上中云第一爲顯種子無上故說雨譬喩十無上者並是七喩三平等殘然於其中有是文殘有是義殘者此是義殘非是文殘也七喩之中已有雨喩十無上內又更重說仍名爲殘前說雨喩普潤三草三草既別令知乘異今說雨喩所潤三草之中形於二草佛種名大草自位相形加名二木所望義別名爲義殘或是文殘謂小中大草文是雨喩破乘同病諸樹大小隨上中下各有所受此雨喩是種子無上前後文別故是文殘此大種子得雨滋潤體用弘廣後得果殊故名無上**論引經言**不離我身是無上義唯大乘有名不離故若種若現若因若果雖皆不離大乘今顯大乘無漏種子以爲因本成佛身故爲顯此種子無上故此品來.

4）781b14-30: 釋名者去疾神功名藥稟潤之形名草有藥非草有草非藥有草有藥非草非藥所喩亦爾敎理行果俱名爲藥今取行藥稟敎脩生不取餘石藥不能生長故世出世種能生長者俱名爲草今取人天善種三乘智因是藥之草違害惡故不取生死惡道種草不稟正法而滋長故意辨三乘種別稟敎成其異乘不欲普明諸種故以藥草爲目是藥卽草持業釋名以別簡通是藥之草依主釋也以此爲喩名藥草喩若云此品下明藥及草喩故名藥草喩非藥卽草者豈一切草皆取喩耶由此故知今說爲善此以二義爲喩一如草性異稟雨滋其類別三根本異稟敎成其三乘二如草稟性各不相知三根亦爾不能知他五乘種異謂乘無別故以藥草爲喩.

チベット語訳は、「釈名」の解説を正しく翻訳しておらず、上記の十無上の解説が混在しており、続く「解妨」の項目の翻訳を欠く。

781c1-19: 解妨難者　問**論解**七喩及十無上皆云雨喩何故題品云藥草喩不言雨喩品　答論說能滋之法以顯所喩故以雨喩爲名經取能喩之體以破彼疑故標藥草倒者以乘無別爲

病破者以機有別爲破故假所潤藥草以況所滋根性由此不標雨爲譬喩亦不雙擧雨草二性爲品　問此品亦言二木何故不標草木品　答據實而言理應雙擧但以正法之設本破生病生有乘同之疾故以草異破之無上顯體尊高未是破於生病故以藥草爲品不以木等標名草寬木狹草小木大顯通三乘不唯於大顯潤生長不唯成熟故 **有解云**藥者是雨法藥能滋草者是機所滋生性以藥喩法以草喩機二既雙彰便無難矣文雖不然理亦何爽又前**譬喩品**有所厭火宅所欣三車二合譬喩但可總言此以所潤機殊破彼執一之病故唯以藥草爲喩.

5）前稿と同じように、『法華経』の引用箇所に対して、梵（ケルン）、蔵（中村瑞隆）、漢（鳩摩羅什訳、『大正新脩大蔵経』）の該当箇所をあげておく。

［1］Skt. 121.1-4; Tib. 121.1-4; Chin. 19a19-22.

6）781c20-27:【1】經爾時世尊至說不能盡（19a19-22）賛曰此品之中大文分三初讚印次迦葉當知下陳述後品末二頌結成說實爲授記之漸此初也先讚印後更歎訝言合理故善哉義契眞故印顯彼所言尙未窮德故更自歎佛同長者以小可喩於大汝同窮子聖德微亦許同故讚且印誠信也敬也信如所言敬如說故佛德難思說之叵盡.

7）［2］Skt. 121.4-5; Tib. 121.4-5; Chin. 19a22-23.

8）781c28-782a4:【2】經迦葉當知至不虛也（19a22-23）賛曰下陳述分二初長行後偈頌初文有二一陳說二結成將臨偈云如來知是一相一味下是初中有三一法述二喩述三合述法中有四初佛興於世二法利群生三受道有殊四不能自達此初也於法自在所說不虛故興於世導利含蠢.

9）［3］Skt. 121.5-7; Tib. 121.5-7; Chin. 19a23-25.

10）782a5-10:【3】經於一切法至一切智地（19a23-25）賛曰二法利群生以大悲智方便善巧離名相法能善說之以利群生所說之理亦契至於佛智境地說合證故到者至合之義或敎順於理理順於行行順於果故言到於佛果地也以此普滋所應化故.

11）［4］Skt. 121.7-8; Tib. 121.7-8; Chin. 19a25-26.

12）782a11-17:【4】經如來觀知至通達無礙（19a25-26）賛曰三受道有殊由識空有法之所歸究竟眞性及知衆生心行所趣故能令彼各得生長無垢稱經云有無所趣意樂所歸故所歸趣卽是三性究竟歸趣故卽眞如心所趣者卽是所欣遍趣之行於理智中達之無礙或由佛達法及衆生心行故能受道令三乘別.

13）［5］Skt. 121.9-10; Tib. 121.8-10; Chin. 19a26-27.

14）782a18-b20:【5】經又於諸法至一切智慧（19a26-27）賛曰四不能自達佛於諸法能究竟盡故能識根性初與三乘後示衆生佛之智慧衆生不爾何理能知自性他性下喩及合皆有此勢故作四科又有釋言法述有二初總明於法自在所說不虛後於一切法以智方便下別顯不虛別顯不虛中有四一能開菩提涅槃二體開曉衆生之心以智方便而演說等是二能顯眞如以示衆生法之所歸是三能悟菩提智故以悟衆生通達無礙是四自曾能入亦令他入示一切智慧是雖作此解順上一乘觀此下文乃成別意又別顯不虛四者一窮法實性二能知空有三知生心樂四能示權實以智方便等者法實亡言以言顯說名智方便此智方便所說之法雖非卽眞然與佛智所證之法亦復無別地者依止佛智所觀依止之處眞境名地意言佛說眞俗諦理合契到於佛智境地體無異故合實法故或敎能順理理能順行行能順果故到佛地一切

智者是佛智故如來觀知等者此能知空有諸法所歸謂遍計所執依他圓成三性法也或所歸趣者卽眞如理諸法究竟所歸處故亦知衆生深心所行者謂知心行及彼深心之所樂行卽是衆生心及所遍趣行達之無礙又於諸法等者旣達諸法究竟明了故能顯示衆生智慧三權一實令生欣證此上意言所說契智境識法空有性解生心行所應學道故能示衆生佛之智慧令其歸入由此四義所說不虛所說不虛故佛智無邊汝何能說佛知諸法識衆生心故能初權後說實法衆生稟之成五乘別衆生無是功德智慧不識法體及衆生心云何能知法之權實而執三乘無有差別.

15）［６］Skt. 121.11-12; Tib. 121.11-12; Chin. 19a27-29.

16）782b21-c4:【６】經迦葉譬如至名色各異（19a27-29）賛曰下喩說中分二初總喩後別喩此初也土地已前喩能有所生已下喩所有三千大千彰所依器一佛化境於中有四一山玉篇艮爲山山産也宣氣散生萬物二川貫穿通流水也三谿爾雅水注川曰谿四谷古鹿反玉篇亦餘玉反水注谿曰谷說文泉之通川曰谷喩大千中有四生類此等土地所有之中卉卽三草木卽二木卉音許貴反百草總名亦衆也卉及木皆有藂林意顯草木各有衆多此雖衆多就中世出世善法種子喩於藥草五乘種子體類各別如種類若干相用有殊如名色各異色者形貌亦色類義.

17）［７］Skt. 122.1-2; Tib. 122.1-2; Chin. 19a29-b1, 1-2.
ただし漢文では【７】【８】の２つに分けられたものが、チベット語訳では１つにまとめられている。

18）782c5-12:【７】經密雲彌布至大千世界（19a29-b1）賛曰下別喩有四一法王出世喩二說敎普滋喩三稟潤各異喩四不自覺知喩密雲彌布是初喩也遍覆以下是第二喩化身隱實八相漸現潛爲廣利如雲密而彌布非卒暴雲不爲災故雲有十德頌中自釋一化佛化三千大千同時出現聲亦遍彼故言遍滿大千世界.

19）Tib. 122.2; Chin. 19b1-2.

20）782c13-20:【８】經一時等澍至及諸藥草（19b1-2）賛曰下第三段稟潤各異喩有二初一雨所滋後稟潤各異初文有三一總標二横滋三竪長此初也一時者應機熟故等澍者一音演說各隨解故澍音之戍時遇二反時雨也今從初反其澤普洽利滋同故洽音候交反霑也遍徹也調和遍灑之義卉木林藂喩如前釋藥草喩善根.

21）［８］Skt. 122.2-6; Tib. 122.2-6; Chin. 19b2-3, 3-4.
ただし漢文では【９】【10】の２つに分けられたものが、チベット語訳では１つにまとめられている。

22）782c21-783a4:【９】經小根小莖至大枝大葉（19b2-3）賛曰此横滋也三乘性異破乘同病根性有三故分三種**涅槃經云**譬如病人有其三種一若遇良醫及以不遇決定可差卽此大草二若遇卽差不遇不差卽此中草三若遇不遇定不可差卽此小草此三乘中各有稟敎理行果四而生長者故皆說有根莖枝葉依敎證理依理起行依行得果如根莖等生次第故又依勝劣果行理敎如次配之又解此三之中皆有四法一種性二發心三修行四得果此四通三如次配之横名三乘竪名四類類依性有故說爲横亦有說四卽是勝解見脩無學此義不遍小草中有故不取之.

23）783a5-b4:【10】經諸樹大小至各有所受（19b3-4）賛曰此竪長也論唯說大木不離我身是種子無上義大草中分大小樹不退位前名爲小樹不退位後名爲大樹此有二義一云七地以前名爲小樹八地已上名爲大樹具四不退故准下頌文但於二木分上中下故合二木以分三品謂五地已前名下創得三摩跋提樂意生身故六七八地爲中得覺法自性意生身故九十二地名上得種類俱生無作行意生身故有義不然初地已前是何品攝豈非小木若依此義初地已前名下純有漏修故初七地名中有漏無漏二雜修故八地已後名上純無漏修故二云初地已前名小樹初地已上名大樹證不退故大小二樹各有下中上者十住十行十迴向爲小樹三十信卽是初發心住攝四決擇分善根卽第十迴向攝由此華嚴但說三十位不說十信發心住中成八相故亦不說四善根法界無量迴向中住四觀故但說舍利弗修道經六十劫退卽是至第六住滿未入第七不退住中故知十信更無別位由此但說三十三阿僧祇地前爲三不說四故對法等說初劫滿已修四善根不說時長別劫修故故四善根十迴向攝大樹三者初二三地名下相同世間故四五六地名中方同出世故七八九十地名上超過世間二乘道故若說三草皆有下中上者小草之中說人爲下欲天爲中色天爲上中草三者七方便爲下聖有學爲中無學名上前是横貫三乘今乃竪通三位.

24）［９］Skt. 122.6-7; Tib. 122.6-7; Chin. 19b4-5.

25）783b5-22:【11】經一雲所雨至華菓敷實（19b4-5）賛曰稟潤各異也能滋敎一所滋卉木各有差別生喩初心長喩後習華敷喩聞敎修行菓實喩證理得果敷音撫夫反開也陳也由各受潤隨其種性生長華菓各各不同以敎對理而忘其機或以敎對後不定性等成熟之根名爲一雨亦名一音所說理法唯一相故退性究竟並作佛故以敎對機忘其理法或對初機未成熟位而有所運名爲三乘亦名三車隨彼機宜初傍引法說而有三故以敎含行名爲三藏詮戒定慧行差別故若以敎含理對機而說名爲二藏謂菩薩聲聞藏阿闍世王經亦名三藏謂菩薩獨覺聲聞藏也今以敎對理及後機一名一雲雨滋彼三機稱其種性名爲三乘現理有所對之機明乘有異敎對機理以明攝義立其藏名將顯理之敎以運載機立其乘稱是二差別.

26）［10］Skt. 122.7-8; Tib. 122.7-8; Chin. 19b5-6.

27）783b23-27:【12】經雖一地所生至各有差別（19b5-6）賛曰下第四不自覺知喩三乘種性依一眞理一地所生依一佛敎一雨所潤如諸草木稟潤雖別不自覺知亦不知他稟潤生長此解似疎尋合當悉.

28）［11］Skt. 122.8-11; Tib. 122.8-11; Chin. 19b6-7, 7-9.
ただし漢文では【13】【14】の２つに分けられたものが、チベット語訳では１つにまとめられている。

29）783b28-30:【13】經迦葉當知至如大雲起（19b6-7）賛曰下第三合述亦四一一有二初皆擧法後皆喩合此合法王出世也.
783c1-2:【14】經以大音聲至大千國土（19b7-9）賛曰此第二合說敎普滋不但身遍聲亦遍故.

30）［12］Skt. 123.1-3; Tib. 123.1-3; Chin. 19b9-11.

31）783c3-7:【15】經於大衆中至佛世尊（19b9-11）賛曰下第三合稟潤各異有二初法說後喩合初中有四一自標召集二他聞普至三佛應導利四生聞獲益初中有二初自標唱後召他

集標唱有三一唱德號二唱利用三唱知見此初也.

32）［13］Skt. 123.3-4; Tib. 123.3-4; Chin. 19b11-13.

33）783c8-14:【16】經未度者至令得涅槃（19b11-13）贊曰此唱利用能滿四願度者離越義解者斷修義一未離苦者願令離苦二未斷惡修善者願斷惡修善三未得安樂者願得安樂四未成佛得涅槃者願成佛得涅槃**瓔珞經說**知苦斷集證滅修道爲四弘願亦卽是此此中四種苦集道滅如次配之.

34）［14］Skt. 123.4-6; Tib. 123.4-6; Chin. 19b13-14.

35）783c15-26:【17】經今世後世至說道者（19b13-14）贊曰此唱知見有三一唱三明二唱二智三唱三法知今後世唱三明也已見名今現去皆今故一切知是眞智一切見是俗智或初是二智後是五眼知開說者知諸境開諸行說諸果知正邪開善惡說斷修又知大乘開獨覺說聲聞又異生有學無學又邪正不定三聚三根三科三世三寶三毒三德三界三漏等又識生死示邪正說通塞又悟知諸道能略開能廣說如次配之道有一種謂一乘一道有二道善惡趣世間出世間乃至十業道等皆如理知.

36）［15］Skt. 123.6-11; Tib. 123.6-11; Chin. 19b14-15, 15-16, 16-19, 19-21.
ただし漢文では【18】【19】【20】【21】の４つに分けられたものが、チベット語訳では１つにまとめられている。

37）783c27-28:【18】經汝等天人至爲聽法故（19b14-15）贊曰上標唱此召集.
783c29:【19】經爾時無數至而聽法（19b15-16）贊曰第二他聞普至.
783c30-784a3:【20】經如來于時至快得善利（19b16-19）贊曰第三佛應導利爲利說大乘爲鈍說二乘爲利說二草爲鈍說小草爲精進說修行爲懈怠說十念生西方等.

38）Chin. 19b19-21.

39）784a4-10:【21】經是諸衆生至漸得入道（19b19-21）贊曰第四生聞獲益有二果一世間果現世安穩後生善處如法以理受於果報不行非法名以道受樂二出世果離障入道或無種性令得前果有種性者令得後果又菩薩道有二一增上生道二決定勝道隨次應知斷二障故任力得道.

40）［16］Skt. 123.12-124.2; Tib. 123.12-124.2; Chin. 19b21-23.

41）784a11-12:【22】經如彼大雲至各得生長（19b21-23）贊曰此合前法稟潤各異.

42）［17］Skt. 124.2-5; Tib. 124.2-5; Chin. 19b23-26.

43）784a13-27:【23】經如來說法至不自覺知（19b23-26）贊曰下第四合有二初法後喩法中初標後釋此標也初佛說後生聞一相者無異相故無相相故**大般若七十三說**諸法皆同一相所謂無相**無量義經云**常說諸法不生不滅無此無彼一相無相一味者一無漏味勝資益味無別體故**勝鬘經云**一相一味謂明解脫味雖說種種諸法不同究竟皆歸一眞如相一無漏味歸實性故何者是一相一味之體謂解脫惑業苦相離所知障分別之相不同無漏有爲起盡體寂滅相所說諸法究竟不離涅槃智性能達此者竟究至於一切種智得菩提故又佛所說理唯一相究竟順契中道智故衆生聞之隨順受持讀誦脩行得成三草二木差別不自覺知.

44）［18］Skt. 124.5-8; Tib. 124.5-8; Chin. 19b26-27.
ただし漢文では【24】【25】の２つに分けられたものが、チベット語訳では１つにま

とめられている。また、チベット語訳では Skt. 124.9-125.1; Tib. 124.9-125.1に相応する経文の注釈を欠いている。

45）784a28-b1:【24】經所以者何至種相體性（19b26-27）賛曰下釋前標有三初明總知次明別知後結佛知衆生不知此初也種相有爲類別體性無爲理本又心行作用爲種相心法體性名體性.

46）Chin. 19b27-29.

47）784b2-5:【25】經念何事至得何法（19b27-29）賛曰此明別知有四一三慧所緣二三慧行相三三慧體四以何行得何果以何敎得何理此四類法皆佛所知但說藥草故唯說此不說知餘.

48）［19］Skt. 125.1-2; Tib. 125.1-2; Chin. 19c1-2, 2-3, 3-6.
ただし漢文では【26】【27】【28】の３つに分けられたものが、チベット語訳では１つにまとめられている。

49）784b6-11:【26】經衆生住於至明了無礙（19c1-2）賛曰此結佛知衆生不知地謂種子或是心等行相體性總名爲地不同前地彼謂一眞彼說佛敎名爲一雨一眞法界名爲一地其中四生名卉木等三乘五乘有性無性佛悉知之衆生不知.
784b12-13:【27】經如彼卉木至上中下性（19c2-3）賛曰擧第四喩合成前法.
784b14-21:【28】經如來知是至一切種智（19c3-6）賛曰陳述有二上陳說訖下結成前有二初明佛知深爲生淺說後讚成迦葉能解深義此初也終歸於空已前明佛知深空之性故體卽眞如非空不空觀衆生心已後爲生淺說能契深理二障雙圓便成種智將護彼意不卽爲說一切種智且說二乘故佛與聲聞由此成異.

50）［20］Skt. 125.2-4; Tib. 125.2-4; Chin. 19c6-8.

51）784b22-23:【29】經汝等迦葉至難解難知（19c6-8）賛曰此讚成迦葉能解深義初標後釋.

52）［21］Skt. 125.5-8; Tib. 125.5-7; Chin. 19c8-11.

53）『法華経』の鳩摩羅什訳では、本章前半の偈の数を54偈半とするために漢文では54偈半となっているが、サンスクリットとチベット語訳では偈の数は44偈であるために、チベット語訳では「54」という偈の数を欠く。以下の文章でも、漢文の偈の分類については、その数が把握できないために、チベット語訳では偈の数字に対する翻訳を欠く。

54）784b24-c13:【30】經爾時世尊至說種種法（19c8-11）賛曰下頌合有五十四頌半其五十二頌半重頌前義後之二頌入品第三段結成說實爲授記之漸初中分二初五十一頌頌前陳述後一頌半頌前結成陳述之中復分爲三初四頌頌前法述次十頌半頌前喩述後三十六頌半頌前合述初中有二初三頌頌前第一佛興於世是諸法之王所說不虛後之一頌頌第四不能自達初中有三一標法王所說不虛二明如來說法希有三重成前說此初也破有者能破一有謂三界爲一業有之所有故或破二有本有中有或破三有卽是三界或破四有謂生有死有中有本有**新翻經論**名前時有或破五有卽是五趣或破七有謂五趣業有中有或破九有謂卽九地九有情居或破二十五有頌曰　四域四惡趣　梵王六欲天　無想天淨居　四空及四禪　或破有者執有三乘無別體心或此頌中初句法身次句報身下半化身.

ただし、チベット語訳は、偈頌の引用とその解説の翻訳を欠く。

55）［22］Skt. 125.9-10; Tib. 125.7-8; Chin. 19c11-12.

56）784c14-17:【31】經如來尊重至不務速說（19c11-12）贊曰此明如來說法希有默者緘默務者趣疾忽遽專好緘默一三實權之妙不樂趣疾忽遽專好急卽陳述必待生機方可說故.

57）［23］Skt. 125.11-12; Tib. 125.9-10; Chin. 19c12-13.

58）784c18-19:【32】經有智若聞至則爲永失（19c12-13）贊曰此成前說恐有疑悔爲永失故不好速說.

59）［24］Skt. 125.13-14; Tib. 125.11-12; Chin. 19c14-15.

60）784c20-24:【33】經是故迦葉至令得正見（19c14-15）贊曰此頌第四不能自達由佛明了究盡諸法知衆生根隨他欲樂勝解等故爲他說法令得正見而諸衆生不能自知上中下性文因前起稱是故言.

61）［25］Skt. 126.1-6; Tib. 126.1-6; Chin. 19c15-19.

62）784c25-785a23:【34】經迦葉當知至如可承攬（19c15-19）贊曰下第二段有十頌半頌前喩述分三初三頌合說初二喩法王出世喩說敎普滋喩次六頌半頌第三稟潤各異喩後之一頌頌不自覺知喩初中有二初一頌總頌前二喩後二頌別釋雲德猶如大雲起於世間初喩也遍覆一切第二喩也頌雲有七德一慧雲含潤如慈心龍起雲含雨七日住待農夫作了方始下雨喩佛慈雲內含萬德待生機而降跡應器熟而宣揚二電光晃耀喩化導明身光智光遍照一切晃音胡廣反光也曜音弋笑反照也三雷聲遠振遠驚群生喩佛出生諸魔恐怖四令衆悅豫豫喜逸也衆喜雲興悅當蔭覆喩見佛出欣將說法舟航五趣五日光掩蔽喩除煩惱**華嚴經說**掩邪見日故六地上淸涼喩令有情居生死地得涅槃故七靉靆垂布如可承攬有解靉者昧義靆者黑色愛逮音同昧闇黑色故名靉靆又廣雅靉靆猶翳薈翳薈雲興盛貌通俗文雲覆日爲靆靉喩佛降靈慈悲興盛作大模軌令生欣樂當得作佛故如承攬承攬乃是可得之狀攬音盧敢反若手取作擥說文作攬撮持得也菩提雖復不可以身心得如可似得非正得也以智證故今更加三一次前文說起於世間悲四生故二龍能起之法報二身現此化故三能澍甘雨滋潤萌牙喩能說法益一切故幷經有十.

63）［26］Skt. 126.7-11; Tib. 126.7-11 Chin. 19c19-20.

64）785a24-30:【35】經其雨普等至率土充洽（19c19-20）贊曰下第二段有六頌半稟潤各異有三一頌雨功能次二頌半所滋長體後三頌所滋長用此初也**涅槃經說**佛於衆生不觀種性乃至下賤僮僕唯觀衆生有善心者卽便慈念如師子兒殺於香象殺兎亦爾不生輕心故名普等四方俱下遍四生故充滿洽霑灑也.

65）［27］Skt. 126.12-127.6; Tib. 126.12-127.6; Chin. 19c20-23, 24-27.
ただし漢文の【36】後半と【37】について、チベット語訳はその翻訳を欠く。

66）785b1-19:【36】經山川險谷至藥木並茂（19c20-23）贊曰此明所滋之體初一頌總次一頌半別滋種性百穀者穀續也楊泉物理論云粱者黍稷之總名稻者粇糯之總名薺者衆豆之總名三穀各二十合爲六十蔬菓之實助穀各二十凡爲百穀故詩曰播厥百穀周易百穀麗于地是也百穀甘蔗蔔三事以喩中大二草三乘有種性故蔗音之夜反蔔音徒刀反或作桃珣張騫西域使還得安石榴葡桃胡桃廣志云葡桃有白黑黃此是小草無種姓人得生人天如乾

地普洽無出世種故總結上云三乘藥草大小二木有種姓者因此雨故普得滋茂此依別義以配其喩亦有本言山川險谷其苗稼者卽是百穀說文草生於田曰苗蒼頡玉篇禾之未秀曰苗苗而不秀是也禾之秀實曰稼莖卽爲禾又云在野曰稼前解苗稼爲異喩因果別後解苗卽是稼但喩總穀.

785b20-25:【37】經其雲所出至皆得鮮澤（19c24-27）賛曰此明所滋長用有二初二頌稟閏生長後一頌稟閏鮮澤上中下等三品不同唯在樹中稱其大小者大小二木並有三故根莖枝葉四義如前此等各有華之與菓皆有光色外作用故華總喩因菓總喩果餘文可知.

67）［28］Skt. 127.5-8; Tib. 127.5-8; Chin. 19c28-29.
ただし、前項では『法華経』の第14偈の後半が引かれ、ここでは同偈の前半が引かれている。

68）785b26-30:【38】經如其體相至而各滋茂（19c28-29）賛曰此頌第四不自覺知所閏是一稟教同故而各滋茂有差別故三乘衆生竟不自覺所得功德故知三乘實有差也智有異故如三草故如二木故.

69）［29］Skt. 127.9-10; Tib. 127.9-10; Chin. 19c29-20a2.

70）785c1-4:【39】經佛亦如是至諸法之實（19c29-20a2）賛曰下第三段有三十六頌半頌前合說文分爲二初二頌頌初二合餘三十四頌半頌前第三稟閏各異合不頌第四不自覺知合此初也.

71）［30］Skt. 127.11-128.2; Tib. 127.11-128.2; Chin. 20a3-7.

72）785c5-11:【40】經大聖世尊至及涅槃樂（20a3-7）賛曰下第二段三十四頌半頌稟閏各異合中長行有四今此唯三初四頌半自標召集次九頌佛應導利後二十一頌生聞獲益唯無第二他聞普至初中有二初三頌半標後一頌召此初也雖有種性未曾聞法乏法名爲枯槁槁亦枯也.

73）［31］Skt. 128.3; Tib. 128.3; Chin. 20a7-8.

74）785c12:【41】經諸天人衆至覲無上尊（20a7-8）賛曰此召也.

75）［32］Skt. 128.4-6; Tib. 128.4-6; Chin. 20a9-11.

76）785c13-17:【42】經我爲世尊至解脫涅槃（20a9-11）賛曰下第二段有九頌佛應導利中有五初二頌佛說勝法次一頌爲大乘因次二頌半平等說法次一頌半專爲利益後二頌不簡好醜此初也正法味甘能療煩惱之疾故喩甘露.

77）［33］Skt. 128.7; Tib. 128.7; Chin. 20a11-12.

78）785c18-19:【43】經以一妙音至而作因緣（20a11-12）賛曰二爲大乘因設說二權皆爲大乘一切種智故.

79）［34］Skt. 128.8-10; Tib. 128.8-10; Chin. 20a13-16.

80）785c20-24:【44】經我觀一切至衆多亦然（20a13-16）賛曰三平等說法物我斷故無有彼此愛憎斷故無怨親心不慳法故我無貪著不嫉妬故亦無限礙故爲一多平等說法卽亦前云若人信歸佛偈意同也.

81）［35］Skt. 128.11-13; Tib. 128.11-13; Chin. 20a16-18.

82）785c25-29:【45】經常演說法至如雨普閏（20a16-18）賛曰四專爲利益去來坐立佛三威

儀略無臥也利樂時故或去謂示入涅槃來謂示成正覺坐謂說法利生立謂待生機熟終不疲勞生於厭怠慈悲深故.

83）［36］Skt. 128.14-129.4; Tib. 128.14-129.4; Chin. 20a18-20.

84）785c30-786a2:【46】經貴賤上下至而無懈倦（20a18-20）賛曰五不簡好醜不擇種姓貧富貴賤但觀善根卽爲說法如殺兎等.

85）［37］Skt. 129.4-6; Tib. 129.4-6; Chin. 20a21-22.

86）786a3-14:【47】經一切衆生至住於諸地（20a21-22）賛曰下第三段有二十一頌生聞獲益分三初九頌半法喩合說稟閏有殊性異次三頌半法喩合說稟閏滋茂因異後八頌法喩合說稟閏成實果異初文有二初八頌法後一頌半喩初文復二初一頌總標後七頌別顯此初也住諸地者謂三乘十地謂乾慧地種性地八人地具見地薄地離欲地已辦地獨覺地菩薩地如來地既下別說三草故此前說三乘共行十地或凡夫地有學地無學地菩薩地如來地或此所說三乘之地卽是無性二乘種性及大乘性隨彼分位卽名爲地.

87）［38］Skt. 129.5-7; Tib. 129.5-7; Chin. 20a22-27.
ただし、前項では『法華経』の第27偈後半が引かれ、ここでは同偈の前半が引かれている。

88）786a15-23:【48】經或處人天至是上藥草（20a22-27）賛曰下七頌別顯中分二初四頌三草後三頌二木此初有三一頌小草二頌中草一頌大草無種姓人與人天樂名爲小草**善戒經云**無種姓人但以人天善根而成熟之或七方便亦名小草二乘名中草菩薩名上草亦卽**勝鬘**所荷四生無聞非法衆生卽小藥草中間二乘卽中藥草菩薩卽是大藥草卽是涅槃三病人也.

89）［39］Skt. 129.7-14; Tib. 129.7-14; Chin. 20a27-b2.

90）786a24-b5:【49】經又諸佛子至名爲大樹（20a27-b2）賛曰此明二木初一半小後一半大卽於大草分爲此二地前爲小木伏疑決定知作佛故十地名大木得二利故證不退故非行不退義准二乘未成無學亦名中草三意生身據決定者唯說無學迴心已後受變易生位決定故不同有學故此不論未入聖位及無種姓可名小草准此地前不名小木若爾何攝故前解善或七地前名爲小木八地已後名爲大木此言不退行不退故.
ただし、続く『大智度論』以下の引用を欠く。
786b5-25: 一切菩薩名大草者**智度論云**譬如雷震小鳥聞之悉皆驚怖孔雀聞之卽爲舞踏故名大草因釋二木分位不同**諸經論中說**得菩提理不一准**大般若第七十四說**五種菩提**金剛般若云**實無小法得佛菩提若有小法得菩提者燃燈佛則不與我授記復**有教言**初發心時便成正覺此經下言八生乃至一生當得菩提亦**有說言**三大劫脩方登正覺諸師於此衆義不同**瑜伽論說**劫有二種一日月歲數卽此論說晝夜月時年二阿僧祇劫諸能超者唯超前劫無超後者故依此義若據無爲眞如無相實無小法可得菩提**般若經**宗說無爲故初地菩提發心便證此證發心非如種性發心與此經同八生乃至一生當得或此經中據證發心論解證得初地菩提故其初發心卽登正覺者種性發心菩提因故三大劫脩得菩提者無上菩提果滿菩提大劫脩故亦不相違佛果廣大非小因成若更異思深乖正道故涅槃言說佛難成與速授記說佛易成與遲授記.

91）［40］Skt. 130.1-7; Tib. 130.1-7; Chin. 20b2-4.

92）786b26-27:【50】經佛平等說至所稟各異（20b2-4）賛曰此喩說稟閏有殊性異.

93）［41］Skt. 130.7-12; Tib. 130.7-12; Chin. 20b4-9.

94）786b28-c2:【51】經佛以此喩至漸增茂好（20b4-9）賛曰下三頌半法喩合說稟潤滋茂因異初一頌半喩所說少如海一滴後二頌法喩合說滋茂因異滴下歴反通俗文靈滴謂之凝切韻作滴有作滴丁計反水下也非此義.

95）［42］Skt. 130.13-14; Tib. 130.13-14; Chin. 20b9-10.

96）786c3-8:【52】經諸佛之法至普得具足（20b9-10）賛曰下有八頌法喩合說稟閏成實果異有二初六頌半法說後一頌半喩說初文有三初一頌總頌能令得果滿足亦是別頌令小草果滿次二頌中草後三頌半大草此初也世間充足謂人天滿.

97）［43］Skt. 130.14-131.6; Tib. 130.14-131.6; Chin. 20b10-13, 13-17.
ただし漢文では【53】【54】の２つに分けられたものが、チベット語訳では１つにまとめられて、その翻訳も曖昧なものである。

98）786c9-10:【53】經漸次脩行至各得增長（20b10-13）賛曰明中草也因人天生漸得道果二乘滿也.
786c11-12:【54】經若諸菩薩至而得增長（20b13-17）賛曰明大草也大草卽二木初一頌半小木後二頌大木.

99）［44］Skt. 131.7-12; Tib. 131.7-12; Chin. 20b18-19, 20-21, 22-24.
ただし漢文では【55】【56】【57】の３つに分けられたものが、チベット語訳では１つにまとめられている。

100）786c13-14:【55】經如是迦葉至各得成實（20b18-19）賛曰此喩合前稟閏成實果滿.

101）786c15-17:【56】經迦葉當知至諸佛亦然（20b20-21）賛曰此第二段頌前結成我同諸佛初權後實汝等信受故極希有.

102）786c18-23:【57】經今爲汝等至悉當成佛（20b22-24）賛曰品第三段結成說實爲授記之漸聲聞所行成佛遠因故是菩薩所行方便之道論云汝等所行是菩薩道者謂發菩提心退已還發者前所修行善根不滅同後得果故二乘脩是大乘之遠方便因名菩薩道.
なお、中村1972, p. 715 に、最後の引用部分の和訳がなされている。

〈付録〉「漢文テキスト「薬草喩品」の科文」

頁：【経】	科文	名目（偈頌数）	引用（言及*）
781a4	0	三門分別	
781a4	0-1	来意	
	0-1-1	前為上根…故此品来	
	0-1-2	論説対治七慢…故説此品	『法華論*』、「譬喩品*」、「信解品*」、『法華論』、『勝鬘経』、『涅槃経』
	0-1-3	方便品初…故此品来	「方便品*」、「譬喩品*」
	0-1-4	十無上中…故此品来	『法華論』、『法華論*』

781b14	0-2	釈名	
781c1	0-3	解妨	『法華論*』
	0-3-A	問答１	
	0-3-B	問答２	
	0-3-C	有解	「譬喩品」
781c20:【１】	1	讃印	
	1-1	讃印	
	1-2	更歎	
781c28:【２】	2	［迦葉當知下］陳述	
	2-1	長行	
	2-1-1	陳説	
	2-1-1-1	法述	
	2-1-1-1-1	仏興於世	
782a5:【３】	2-1-1-1-2	法利群生	
782a11:【４】	2-1-1-1-3	受道有殊	『無垢称経』
782a18:【５】	2-1-1-1-4	不能自達	
	2-1-1-1-4-A	有釈	
782b21:【６】	2-1-1-2	喩述	
	2-1-1-2-1	総喩	
782c5:【７】	2-1-1-2-2	別喩	
	2-1-1-2-2-1	法王出世喩	
	2-1-1-2-2-2	説教普滋喩	
782c13:【８】	2-1-1-2-2-3	稟潤各異喩	
	2-1-1-2-2-3-1	一雨所滋	
	2-1-1-2-2-3-1-1	総標	
782c21:【９】	2-1-1-2-2-3-1-2	横滋	『涅槃経』
783a5:【10】	2-1-1-2-2-3-1-3	竪長	『法華論』、『華厳経*』、『対法等*』
783b5:【11】	2-1-1-2-2-3-2	稟潤各異	『阿闍世王経*』
783b23:【12】	2-1-1-2-2-4	不自覚知喩	
783b28:【13】	2-1-1-3	合述	
	2-1-1-3-1	合法王出世	
783c1:【14】	2-1-1-3-2	合説教普滋	
783c3:【15】	2-1-1-3-3	合稟潤各異	
	2-1-1-3-3-1	法説	
	2-1-1-3-3-1-1	自標召集	
	2-1-1-3-3-1-1-1	［自］標唱	
	2-1-1-3-3-1-1-1-1	唱徳号	
783c8:【16】	2-1-1-3-3-1-1-1-2	唱利用［能満四願］	『瓔珞経』
783c15:【17】	2-1-1-3-3-1-1-1-3	唱知見	

	2-1-1-3-3-1-1-1-3-1	唱三明	
	2-1-1-3-3-1-1-1-3-2	唱二智	
	2-1-1-3-3-1-1-1-3-3	唱三法	
783c27:【18】	2-1-1-3-3-1-1-2	召［他］集	
783c29:【19】	2-1-1-3-3-1-2	他聞普至	
783c30:【20】	2-1-1-3-3-1-3	仏応導利	
784a4:【21】	2-1-1-3-3-1-4	生聞獲益［有二果］	
784a11:【22】	2-1-1-3-3-2	喩合［／合前法稟潤各異］	
784a13:【23】	2-1-1-3-4	合不自覚知	
	2-1-1-3-4-1	法	
	2-1-1-3-4-1-1	標	『大般若波羅蜜多経』第七十三巻、『無量義経』、『勝鬘経』
784a28:【24】	2-1-1-3-4-1-2	釈	
	2-1-1-3-4-1-2-1	明総知	
784b2:【25】	2-1-1-3-4-1-2-2	明別知［有四］	
784b6:【26】	2-1-1-3-4-1-2-3	結仏知衆生不知	
784b12:【27】	2-1-1-3-4-2	喩［／挙第四喩合成前法］	
784b14:【28】	2-1-2	結成	
	2-1-2-1	明仏知深為生浅説	
784b22:【29】	2-1-2-2	讃成迦葉能解深義	
	2-1-2-2-1	標	
	2-1-2-2-2	釈	
784b24:【30】	2-2	偈頌（54.5）	
	2-2-1	重頌前義（52.5）	
	2-2-1-1	頌前陳述（51）	
	2-2-1-1-1	頌前法述（4）	
	2-2-1-1-1-1	頌前第一仏興於世是諸法之王所説不虚（3）	
	2-2-1-1-1-1-1	標法王所説不虚（1）	『新翻経論*』
784c14:【31】	2-2-1-1-1-1-2	明如来説法希有（1）	
784c18:【32】	2-2-1-1-1-1-3	［重］成前説（1）	
784c20:【33】	2-2-1-1-1-2	頌第四不能自達（1）	
784c25:【34】	2-2-1-1-2	頌前喩述（10.5）	
	2-2-1-1-2-1	合説初二喩法王出世喩説教普滋喩（3）	
	2-2-1-1-2-1-1	総頌前二喩（1）	
	2-2-1-1-2-1-2	別釈雲徳（2）	『華厳経*』
785a24:【35】	2-2-1-1-2-2	頌第三稟潤各異喩（6.5）	
	2-2-1-1-2-2-1	雨功能（1）	『涅槃経』

785b1:【36】	2-2-1-1-2-2-2	所滋長体（2.5）	
	2-2-1-1-2-2-2-1	総（1）	
	2-2-1-1-2-2-2-2	別（1.5）	
785b20:【37】	2-2-1-1-2-2-3	所滋長用（3）	
	2-2-1-1-2-2-3-1	稟閏生長（2）	
	2-2-1-1-2-2-3-2	稟閏鮮沢（1）	
785b26:【38】	2-2-1-1-2-3	頌不自覚知喩（1）	
785c1:【39】	2-2-1-1-3	頌前合述［/ 説］(36.5)	
	2-2-1-1-3-1	頌初二合（2）	
785c5:【40】	2-2-1-1-3-2	頌前第三稟［閏］各異合不頌第四不自覚知合（34.5）	
	2-2-1-1-3-2-1	自標召集（4.5）	
	2-2-1-1-3-2-1-1	標（3.5）	
785c12:【41】	2-2-1-1-3-2-1-2	召（1）	
785c13:【42】	2-2-1-1-3-2-2	仏応導利（9）	
	2-2-1-1-3-2-2-1	仏説勝法（2）	
785c18:【43】	2-2-1-1-3-2-2-2	為大乗因（1）	
785c20:【44】	2-2-1-1-3-2-2-3	平等説法（2.5）	
785c25:【45】	2-2-1-1-3-2-2-4	専為利益（1.5）	
785c3:【46】	2-2-1-1-3-2-2-5	不簡好醜（2）	
786a3:【47】	2-2-1-1-3-2-3	生聞獲益（21）	
	2-2-1-1-3-2-3-1	法喩合説稟閏有殊性異（9.5）	
	2-2-1-1-3-2-3-1-1	法（8）	
	2-2-1-1-3-2-3-1-1-1	総標（1）	
786a15:【48】	2-2-1-1-3-2-3-1-1-2	別顕（7）	
	2-2-1-1-3-2-3-1-1-2-1	三草（4）	
	2-2-1-1-3-2-3-1-1-2-1-1	小草（1）	『善戒経』『勝鬘経*』
	2-2-1-1-3-2-3-1-1-2-1-2	中草（1）	
	2-2-1-1-3-2-3-1-1-2-1-3	大草（1）	
786a24:【49】	2-2-1-1-3-2-3-1-1-2-2	二木（3）	
	2-2-1-1-3-2-3-1-1-2-2-1	小（1.5）	
	2-2-1-1-3-2-3-1-1-2-2-2	大（1.5）	『大智度論』、『諸経論*』、『大般若波羅蜜多経』第七十四巻*、『金剛般若』、「有教」、「有説」、『瑜伽論』、『般若経*』、『涅槃経』

786b26:【50】	2-2-1-1-3-2-3-1-2	喩［/喩説禀閏有殊性異］（1.5）	
786b28:【51】	2-2-1-1-3-2-3-2	法喩合説禀閏滋茂因異（3.5）	
	2-2-1-1-3-2-3-2-1	喩所説少如海一滴（1.5）	
	2-2-1-1-3-2-3-2-2	法喩合説滋茂因異（2）	
786c3:【52】	2-2-1-1-3-2-3-3	法喩合説禀閏成実果異（8）	
	2-2-1-1-3-2-3-3-1	法説（6.5）	
	2-2-1-1-3-2-3-3-1-1	総頌能令得果満足亦是別頌令小草果満（1）	
786c9:【53】	2-2-1-1-3-2-3-3-1-2	中草（2）	
786c11:【54】	2-2-1-1-3-2-3-3-1-3	大草（3.5）	
	2-2-1-1-3-2-3-3-1-3-1	小木（1.5）	
	2-2-1-1-3-2-3-3-1-3-2	大木（2）	
786c13:【55】	2-2-1-1-3-2-3-3-2	喩説［/ 合前禀閏成実果満］(1.5)	
786c15:【56】	2-2-1-2	頌前結成（1.5）	
786c18:【57】	3［/2-2-2］	［品末二頌 / 入品第三段］結成説実為授記之漸（2）	『法華論』

〈キーワード〉

『妙法蓮華経玄賛』、『法華経』、「薬草喩品」、基、慈恩大師